

有田川町財務書類

(概要版)

～統一的な基準による財務書類～

令和2年度



令和2年度有田川町の財務書類（概要版）

地方自治体の会計は、単式簿記による現金主義会計を採用しており、予算の適正、確実な執行などの面では優れていますが、単年度の現金収支を示すものであることから、資産や負債等のストック情報や、現金の移動を伴わない減価償却費、引当金などのコスト情報が把握できないといった課題があります。これを補完するため、ストック・フロー情報を把握し、発生主義、複式簿記といった企業会計的手法を活用した地方公会計制度が推進され、全地方自治体において新たな統一の基準に基づく財務書類を作成することとなりました。町では、平成28年度決算からこの「統一の基準」により財務書類を作成します。

本年度の概要については、次のとおりです。

（１）財務書類の作成

財務書類の体系は、次の4表とこれら財務書類に関連する事項についての附属明細書、注記となります。

- ① 貸借対照表（BS：Balance Sheet バランスシート）
- ② 行政コスト計算書（PL：Profit and Loss statement プロフィット&ロスステートメント）
- ③ 純資産変動計算書（NW：Net Worth statement ネットワースステートメント）
- ④ 資金収支計算書（CF：Cash Flow statement キャッシュフローステートメント）

（２）財務書類の対象となる範囲

財務書類の対象となる範囲については、以下の図のとおりです。

連結団体

- ・和歌山県市町村総合事務組合
- ・和歌山地方税回収機構
- ・有田周辺広域圏事務組合
- ・有田郡老人福祉施設事務組合
- ・有田聖苑事務組合
- ・和歌山県後期高齢者医療広域連合
- ・一般財団法人有田川町ふるさと開発公社
- ・有田観光物産センター株式会社

全体会計

- ・有田川町国民健康保険事業特別会計
- ・有田川町介護保険事業特別会計
- ・有田川町後期高齢者医療特別会計
- ・有田川町簡易水道事業特別会計
- ・有田川町公共下水道事業特別会計
- ・有田川町農業集落排水事業特別会計
- ・有田川町簡易排水事業特別会計
- ・有田川町浄化槽事業特別会計
- ・有田川町かなや明恵峡温泉特別会計
- ・有田川町特別養護老人ホーム等事業特別会計
- ・有田川町水道事業会計（法適用）
- ・有田川町岩倉財産区管理会特別会計
- ・有田川町粟生財産区会計
- ・有田川町城山山林財産区会計
- ・有田川町八幡山林財産区会計
- ・有田川町安諦山林財産区会計

一般会計等

- ・一般会計

(3) 財務書類の概要

1. 作成基準日 (出納整理期間収支を含む)

令和3年3月31日 (令和2年度決算)

2. 基本情報

人口 (R3年1月1日住民基本台帳)	26,104人
面積	351.84 km ²
職員数 (R2.4.1普通会計一般職員等)	318人

類似団体区分	町村V-0
標準財政規模	10,226.446千円
財力指数 (令和2年度単年)	0.354

実質赤字比率	-
連結実質赤字比率	-

実質公債費率	13.0%
将来負担比率	3.2%

経常収支比率	90.0%
--------	-------

3. 財務書類4表の構成の相互関係

【財務書類の金額単位：百万円】

(注) 四捨五入の関係で一致しない部分があります。また、金額のない科目は「-」とし、金額が0円ではないが表示単位の関係で「0」としている科目があります。マイナスの値は「▲」で表示しています。

貸借対照表 年度末時点までこれまで積み上げてきた資産とその負債をどのような財源で賄ってきたかを表すもの。

区分	一般	全体	連結	区分	一般	全体	連結
資産 (これまで形成してきた資産)				負債 (将来世代が負担する額)			
1 固定資産	46,012	73,223	75,853	1 固定負債	17,744	32,561	33,272
①有形固定資産	37,768	63,371	65,718	①地方債	15,138	27,399	27,969
②無形固定資産	18	20	21	②退職手当引当金	2,563	2,615	2,735
③投資その他の資産	8,226	9,832	10,114	③その他	42	2,546	2,568
2 流動資産	4,936	6,405	7,179	2 流動負債	2,696	3,907	4,193
①現金預金	730	1,911	2,495	①1年以内償還予定地方債	2,378	3,365	3,425
②未収金	72	346	355	②未払金	-	170	378
③基金	4,136	4,136	4,314	③その他	318	372	390
④その他	▲1	12	16	負債合計	20,440	36,468	37,464
				純資産	30,508	43,160	45,568
				(現在までの世代が負担した額)			
				純資産合計	30,508	43,160	45,568
資産合計	50,948	79,628	83,032	負債・純資産合計	50,948	79,628	83,032

資金収支計算書 貸借対照表における「資金」について、その収支を性質別に表すもの。

収入区分	一般	全体	連結	支出区分	一般	全体	連結
業務活動収入 (うち臨時収入)	16,812 (3,814)	23,752 (3,817)	27,854 (3,817)	業務活動支出 (うち支払利息)	14,623 (121)	20,733 (288)	24,499 (289)
投資活動収入 (うち基金取崩)	1,456 (1,057)	2,071 (1,063)	2,547 (1,077)	投資活動支出 (うち基金積立金)	3,440 (1,125)	4,728 (1,277)	5,811 (1,307)
財務活動収入	2,250	3,061	3,526	財務活動支出	2,290	3,185	3,218
収入合計	20,518	28,884	33,927	支出合計	20,353	28,646	33,528

区分	一般	全体	連結
本年度資金収支	164	236	398
前年度末資金残高	458	1,567	1,979
本年度末歳計外現金残高	108	108	114
本年度末資金残高	730	1,911	2,495

区分	本年度資金収支		
	一般	全体	連結
業務活動	2,188	3,018	3,354
投資活動	▲1,984	▲2,657	▲3,264
財務活動	▲40	▲124	308
合計	164	236	398

行政コスト計算書 経常的な活動に伴う費用とそれに対応する収入を表すもの。

区分	一般	全体	連結	区分	一般	全体	連結
経常費用 A	12,481	19,576	23,324	経常収益 B	448	1,305	1,527
①人件費	2,794	3,124	3,367				
②物件費等	4,172	6,245	6,715				
③その他業務費用	205	430	419				
④補助金等・社会保障給付	2,850	9,756	12,798				
⑤他会計繰出金等	2,459	20	26				
				区分	一般	全体	連結
				純経常行政コスト C (A-B)	12,033	18,271	21,798
				臨時損失 D	3,257	3,257	3,257
				臨時利益 E	0	0	0
				純行政コスト F (C+D-E)	15,290	21,528	25,055

純資産変動計算書 純資産が1年間でどのような要因で増減したかを表すもの。

区分	一般	全体	連結	純資産の増減要因	一般	全体	連結
純行政コスト(▲) F	▲15,290	▲21,528	▲25,055	資産評価差額 I	98	107	132
財源 G	16,873	23,399	27,554	無償所管換等 J	▲410	▲504	▲499
①税収等	11,180	13,778	15,729	その他 K	0	0	▲10
②国県等支出金	5,694	9,621	11,825				
本年度差額 H (G-F)	1,583	1,871	2,499	本年度純資産変動額 L (H+I+J+K)	1,271	1,474	2,123
				区分	一般	全体	連結
				前年度末純資産残高	29,236	41,686	43,445
				本年度純資産変動額 L	1,271	1,474	2,123
				本年度末純資産残高	30,508	43,160	45,568

(4) 財務書類の内容

貸借対照表

令和3年3月31日 現在

(注) 四捨五入の関係で一致しない部分があります。

【財務書類の金額単位：百万円】

区分	一般	全体	連結	区分	一般	全体	連結
資産（これまでに形成してきた資産）				負債（将来世代が負担する額）			
1 固定資産	46,012	73,223	75,853	1 固定負債	17,744	32,561	33,272
①有形固定資産	37,768	63,371	65,718	①地方債	15,138	27,399	27,969
・事業用資産	29,075	30,403	32,726	②退職手当引当金	2,563	2,615	2,735
土地	12,561	12,845	13,421	③その他	42	2,546	2,568
建物	14,157	15,159	15,674				
工作物	2,054	2,096	2,139				
その他	302	302	1,491				
・インフラ資産	8,339	32,043	32,043				
土地	2,418	3,782	3,782				
建物	122	1,632	1,632				
工作物	5,544	26,234	26,234				
その他	255	395	395				
・物品	354	925	949				
②無形固定資産	18	20	21				
③投資その他の資産	8,226	9,832	10,114				
うち基金	8,115	9,680	10,003				
2 流動資産	4,936	6,405	7,179	2 流動負債	2,696	3,907	4,193
①現金預金	730	1,911	2,495	①1年以内償還予定地方債	2,378	3,365	3,425
②未収金	72	346	355	②未払金	-	170	378
③基金	4,136	4,136	4,314	③その他	318	372	390
うち財政調整基金	4,136	4,136	4,314				
④その他	▲1	12	16	負債合計	20,440	36,468	37,464
				純資産	30,508	43,160	45,568
				・固定資産等形成分	50,148	77,359	80,167
				・余剰分（不足分）	▲19,640	▲34,199	▲34,814
				・他団体出資等分			
				純資産合計	30,508	43,160	45,568
資産合計	50,948	79,628	83,032	負債・純資産合計	50,948	79,628	83,032

「貸借対照表」は、会計年度末の町の財政状態（資産・負債・純資産の残高・内訳）についての情報を明らかにすることを目的としています。左右の合計額が等しくなり、資産と負債のバランスを把握することができます。

◆資産

町が行政サービスを提供するために保有し、あるいは将来サービスを提供するために用いることができる資源のことです。

- ・事業用資産
庁舎・学校・保育所などのインフラ資産以外の有形固定資産
- ・インフラ資産
道路、公園、水道、下水道など
- ・物品
取得価格が50万円以上のもの
- ・無形固定資産
ソフトウェア
- ・投資その他の資産
有価証券、出資金、特定目的基金、長期延滞債権など
- ・流動資産
現金預金、財政調整基金、未収金など

◆負債

町のこれまでの行政活動により有することとなった、将来世代が負担する債務のことです。
主に地方債がありますが、引当金なども計上されます。

◆純資産

町のこれまでの行政活動の結果としての「資産」から将来世代が負担する債務である「負債」を差引きしたものです。

純資産は、これまでの世代の負担によって蓄積された、将来世代が利用可能な資源の蓄積額であると考えられます。

行政コスト計算書

自 令和2年4月 1日
至 令和3年3月31日

(注) 四捨五入の関係で一致しない部分があります。

【財務書類の金額単位：百万円】

区分	一般	全体	連結	区分	一般	全体	連結
経常費用 A	12,481	19,576	23,324	経常収益 B	448	1,305	1,527
業務費用	7,171	9,799	10,501	使用料及び手数料	124	818	844
①人件費	2,794	3,124	3,367	その他	324	487	683
職員給与費	2,136	2,404	2,594				
賞与等引当金繰入額	182	208	218				
退職手当引当金繰入額	-	-	-				
その他	475	512	556				
②物件費等	4,172	6,245	6,715				
物件費	2,866	3,659	4,045				
維持補修費	188	436	477				
減価償却費	1,119	2,148	2,191				
その他	-	2	2				
③その他業務費用	205	430	419				
支払利息	121	288	289				
徴収不能引当金繰入額	2	5	5				
その他	82	138	125				
移転費用	5,309	9,776	12,823				
補助金等	2,257	9,155	7,792				
社会保障給付	593	601	5,006				
他会計への繰出金	2,451	-	-				
その他	8	20	26				

区分	一般	全体	連結
純経常行政コスト C (A-B)	12,033	18,271	21,798
臨時損失 D	3,257	3,257	3,257
臨時利益 E	0	0	0
純行政コスト F (C+D-E)	15,290	21,528	25,055

「行政コスト計算書」は、会計年度中の町の費用と収益の取引高を明らかにすることを目的としています。費用や収益には、発生主義による減価償却費や徴収不能引当金繰入額などの現金支出を伴わないコストが含まれ、これまでの現金主義による歳入歳出決算書では見えにくかった行政コストの情報を、より正確に把握することが可能となっています。

◆経常費用とは、毎会計年度、経常的に発生するものをいいます。経常費用は、人件費、物件費等の「業務費用」と補助金等、社会保障給付等の「移転費用」に分類します。このように資本形成や地方債元金償還に関わる経費を除く、行政サービスを提供するための経費となります。

◆経常収益とは、毎会計年度、経常的に発生するものをいいます。内訳は「使用料及び手数料」及び「その他」に分類されます。税金等や国県等補助金といった直接的な対価性のない収入を除いた、行政サービスの対価としての使用料や手数料、財産収入や諸収入などとなります。

純資産変動計算書

自 令和2年4月 1日

(注) 四捨五入の関係で一致しない部分があります。

至 令和3年3月31日

【財務書類の金額単位：百万円】

区分	一般	全体	連結	純資産の増減要因	一般	全体	連結
純行政コスト(▲) F	▲ 15,290	▲ 21,528	▲ 25,055	資産評価差額 I	98	107	132
				無償所管換等 J	▲ 410	▲ 504	▲ 499
財源 G	16,873	23,399	27,554	その他 K	0	0	▲ 10
①税収等	11,180	13,778	15,729				
②国県等支出金	5,694	9,621	11,825				
本年度差額 H (F+G)	1,583	1,871	2,499	本年度純資産変動額 L (H+I+J+K)	1,271	1,474	2,123

区分	一般	全体	連結
前年度末純資産残高	29,236	41,686	43,445
本年度純資産変動額 L	1,271	1,474	2,123
本年度末純資産残高	30,508	43,160	45,568

「純資産変動計算書」は、会計年度中の町の純資産の変動、内部構成の変動を明らかにすることを目的としています。純資産の増加要因としては、税収等、国県等支出金の財源の固定資産等形成成分への流入、寄付等による資産の無償取得、過年度取得資産に係る固定資産台帳価格の修正（増加）などがあります。純資産の減少要因としては、資産の売却や除却、過年度取得資産に係る固定資産台帳価格の修正（減少）などがあります。これらは、貸借対照表の純資産合計とその内訳である「固定資産等形成成分」と「余剰分（不足分）」に連動します。

◆固定資産等形成成分とは、資産形成のために充当した資源の蓄積をいい、原則として金銭以外の形態（固定資産等）で保有されます。具体的には、貸借対照表の固定資産と短期貸付金、基金の合計となります。

◆余剰分（不足分）とは、町の費消可能な資源の蓄積をいい、原則として金銭の形態で保有されます。具体的には、貸借対照表の純資産額合計から、固定資産等形成成分を差し引いた額となります。地方債の発行により社会資本を形成などを行っている団体では、この額がマイナスとなる場合が多く基準日時点における将来世代の負担となる地方債償還、引当金などの金銭等の必要額を表しています。

資金収支計算書

自 令和2年4月 1日
至 令和3年3月31日

(注) 四捨五入の関係で一致しない部分があります。

【財務書類の金額単位：百万円】

収入区分	一般	全体	連結	支出区分	一般	全体	連結
業務活動収入	16,812	23,752	27,854	業務活動支出	14,623	20,733	24,499
業務収入	12,998	19,935	24,037	業務支出	11,366	17,476	21,242
税収等収入	11,156	13,687	15,525	業務費用支出	6,056	7,700	8,418
国県等補助金収入	1,482	5,019	7,067	人件費支出	2,800	3,130	3,373
使用料及び手数料収入	124	831	857	物件費等支出	3,054	4,147	4,573
その他の収入	235	397	587	支払利息支出	121	288	289
臨時収入	3,814	3,817	3,817	その他の支出	82	135	184
				移転費用支出	5,309	9,776	12,824
				補助金等支出	2,257	9,155	7,792
				社会保障給付支出	593	601	5,006
				他会計への繰出金支出	2,451	-	-
				その他の支出	8	20	26
				臨時支出	3,257	3,257	3,257
				災害復旧事業費支出	99	99	99
				その他の支出	3,159	3,159	3,159
投資活動収入	1,456	2,071	2,547	投資活動支出	3,440	4,728	5,811
国県等補助金収入	398	785	1,063	公共施設等整備費支出	2,315	3,451	4,503
基金取崩収入	1,057	1,063	1,077	基金積立金支出	1,125	1,277	1,307
貸付金元金回収収入	1	1	1	投資及び出資金支出	-	-	0
資産売却収入	0	0	0	貸付金支出	-	-	-
その他の収入	0	222	406	その他の支出	-	-	-
財務活動収入	2,250	3,061	3,526	財務活動支出	2,290	3,185	3,218
地方債等発行収入	2,250	3,061	3,526	地方債等償還支出	2,253	3,147	3,177
その他の収入	-	-	-	その他の支出	38	38	41
収入合計	20,518	28,884	33,927	支出合計	20,353	28,646	33,528

区分	一般	全体	連結
本年度資金収支	164	236	398
前年度末資金残高	458	1,567	1,979
本年度末歳計外現金残高	108	108	114
本年度末資金残高	730	1,911	2,495

区分	本年度資金収支		
	一般	全体	連結
業務活動	2,188	3,018	3,354
投資活動	▲ 1,984	▲ 2,657	▲ 3,264
財務活動	▲ 40	▲ 124	308
合計	164	236	398

「資金収支計算書」は、会計年度中における町の現金の収入と支出の収支を、「業務活動収支」、「投資活動収支」、「財務活動収支」の3つに分類し、資金の利用や獲得能力を明らかにすることを目的としています。
行政コスト計算書には、発生主義による現金支出を伴わないコスト等が含まれますが、資金収支計算書では、現金の収支のみが記載されることから貸借対照表の現金預金に連動します。

- ◆業務活動収支とは、行政サービスの提供に関する経常的、臨時的な行政活動に伴う資金収支をいいます。
- ◆投資活動収支とは、公共施設整備や基金積立・取崩など、町の資産の増減に伴う資金収支をいいます。
- ◆財務活動収支とは、地方債発行や元金償還など、町の負債の増減に伴う資金収支をいいます。

(5) 財務書類を活用した財政分析

現在、財務書類の分析指標としては、次のようなものがあります。

これらは、各団体の統一な基準による財務書類の数値や指標が出そろった後に、類似団体や過去の指標などと比較して、「有田川町の現在の状況」を分析することができます。

1. 資産形成度・・将来世代に残る資産はどのくらいあるのか

(1) 住民一人当たり資産額

貸借対照表上の資産総額から住民一人あたりの資産額を算定します。この指標により、他の団体と比較が容易になります。

	平成30年度		令和元年度		令和2年度		
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体	
資産総額 (百万円)	A	49,812	78,012	49,731	78,196	50,948	79,628
人口 (人)	B	26,590	26,590	26,325	26,325	26,104	26,104
住民一人当たり資産額 (万円)	A/B	187.3	293.4	188.9	297.0	195.2	305.0

(2) 歳入額対資産比率

貸借対照表上の資産総額が何年分の歳入に相当するかを表すものです。

	平成30年度		令和元年度		令和2年度		
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体	
資産総額 (百万円)	A	49,812	78,012	49,731	78,196	50,948	79,628
歳入総額 (百万円)	B	16,041	25,551	16,245	25,845	20,976	30,451
歳入額対資産比率 (年)	A/B	3.1	3.1	3.1	3.0	2.4	2.6

*歳入総額とは、資金収支報告書の業務収入、臨時収入、投資活動収入、財務活動収入、前年度末資金残高の合計

(3) 有形固定資産減価償却率

有形固定資産のうち、償却資産（建物や工作物など）の耐用年数に資産の取得からどの程度経過しているかを表します。

この指標が高いほど、公共施設等が老朽化している傾向にあり、施設の更新・整備の目安となります。

	平成30年度		令和元年度		令和2年度		
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体	
減価償却累計額 (百万円)	A	25,800	41,697	26,771	40,994	27,638	42,801
有形固定資産 (百万円)	B	47,405	86,724	48,014	85,289	49,516	87,923
有形固定資産減価償却率 (%)	A/B	54.4	48.1	55.8	48.1	55.8	48.7

*有形固定資産とは、有形固定資産合計－土地等の非償却資産＋減価償却累計額

*参考 令和2年度

区分	一般	全体	
有形固定資産	37,768	63,371	A
減価償却累計額	27,638	42,801	B
土地等非償却資産	15,890	18,249	C 物品、建設仮勘定含む
有形固定資産	49,516	87,923	A+B-C

(4) 有形固定資産の行政目的別割合

有形固定資産の行政目的別の割合を算出することにより、行政分野ごとの社会資本形成の比重の把握が可能となります。

また経年比較することにより行政分野ごとに社会資本がどのように形成されてきたかを把握することができます。

区分	平成30年度		令和元年度		令和2年度	
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
生活インフラ・国土保全	15.2%	47.5%	15.5%	47.6%	16.1%	47.7%
教育	41.5%	24.5%	40.7%	24.0%	37.9%	22.6%
福祉	8.7%	6.4%	8.4%	6.2%	7.9%	5.8%
環境衛生	2.6%	1.5%	2.8%	1.7%	2.7%	1.8%
産業振興	9.4%	6.5%	9.7%	6.6%	9.8%	6.7%
消防	6.8%	4.0%	7.0%	4.1%	8.5%	5.1%
総務	15.8%	9.5%	16.0%	9.7%	17.1%	10.3%
全体	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

区分	平成30年度		令和元年度		令和2年度	
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
生活インフラ・国土保全	5,585千円	29,630千円	5,694千円	29,687千円	6,091千円	30,236千円
教育	15,275千円	15,275千円	14,994千円	14,994千円	14,301千円	14,301千円
福祉	3,202千円	4,001千円	3,097千円	3,888千円	2,977千円	3,672千円
環境衛生	965千円	965千円	1,032千円	1,064千円	1,022千円	1,139千円
産業振興	3,456千円	4,076千円	3,558千円	4,151千円	3,683千円	4,250千円
消防	2,503千円	2,503千円	2,580千円	2,580千円	3,228千円	3,229千円
総務	5,814千円	5,892千円	5,892千円	6,064千円	6,466千円	6,544千円
全体	36,800千円	62,342千円	36,847千円	62,428千円	37,768千円	63,371千円

2. 世代間公平性・・将来世代と現世代との負担の分担は適切か

(1) 純資産比率

地方債の発行を通じて、将来世代と現世代の負担の配分を行うとすれば、純資産の変動は、将来世代と現世代との間で負担の割合が変動したことを意味します。

たとえば、純資産の増加は、現世代の負担によって将来世代も利用可能な資源を蓄積したことを意味する一方、純資産の減少は、将来世代が利用可能な資源を現世代が費消して便益を享受していると捉えることができます。

			平成30年度		令和元年度		令和2年度	
			一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
純資産	(百万円)	A	27,625	38,459	29,236	41,686	30,508	43,160
資産総額	(百万円)	B	49,812	78,012	49,731	78,196	50,948	79,628
純資産比率	(%)	A/B	55.5	49.3	58.8	53.3	59.9	54.2

(2) 将来世代負担比率

有形固定資産などの社会資本等に対して、将来の償還等が必要な負債による形成割合を算出することにより、社会資本等形成に係る将来世代の負担の程度を把握することができます。

			平成30年度		令和元年度		令和2年度	
			一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
地方債残高	(百万円)	A	13,414	26,741	11,951	25,282	12,120	25,368
有形・無形固定資産合計	(百万円)	B	36,841	62,388	36,877	62,461	37,786	63,391
将来世代負担比率	(%)	A/B	36.4	42.9	32.4	40.5	32.1	40.0

* 地方債残高は、特例地方債の残高を控除した後の額

* 参考

区分	一般	全体	
特例地方債残高	5,396	5,396	臨時財政対策債等

3. 持続可能性（健全性）・・財政に持続可能性があるか

(1) 住民一人当たり負債額

負債額を人口で除して住民一人当たり負債額とすることにより、他の団体と比較が容易になります。

			平成30年度		令和元年度		令和2年度	
			一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
負債合計	(百万円)	A	22,187	39,553	20,494	36,510	20,440	36,468
人口	(人)	B	26,590	26,590	26,325	26,325	26,104	26,104
住民一人当たり負債額	(万円)	A/B	83.4	148.8	77.8	138.7	78.3	139.7

(2) 基礎的財政収支（プライマリーバランス）

資金収支計算上の支払利息支出を除いた業務活動収支と投資活動収支の合計額を算出することにより、地方債等の元利償還額を除いた歳出と、地方債等発行収入を除いた歳入のバランスを表す指標となります。プラスであれば、その年の行政サービスを借金などの将来世代への負担を増やすことなく、現役世代の税収等で賄えているといえます。

			平成30年度		令和元年度		令和2年度	
			一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
業務活動収支	(百万円)	A	2,218	3,377	2,447	3,762	2,309	3,306
投資活動収支	(百万円)	B	▲ 474	▲ 1,186	▲ 760	▲ 1,705	▲ 1,916	▲ 2,443
基礎的財政収支	(百万円)	A+B	1,744	2,191	1,687	2,057	393	863

* 業務活動収支・・支払利息支出を除く。

* 投資活動収支・・基金積立金支出及び基金取崩収入を除く。

(3) 債務償還可能年数

債務の償還能力を表す指標で、償還財源の上限額を全て債務償還に充当する場合、何年で現在の債務を償還できるかを表します。この指標が低いほど、償還能力が高いといえます。尚、臨時財政対策債発行可能額を分母に加えない場合の債務償還可能年数を参考までに算出しています。

	平成30年度		令和元年度		令和2年度	
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
将来負担額 (百万円) A	33,779	33,779	32,577	32,577	33,191	33,191
充当可能基金残高 (百万円) B	11,452	11,452	11,576	11,576	11,749	11,749
業務収入等 (百万円) C	13,184	20,549	13,462	20,855	16,812	23,752
臨時財政対策債発行可能額 (百万円) D	459	459	348	348	343	343
業務支出 (百万円) E	11,159	17,552	11,166	17,420	14,623	20,733
債務償還可能年数 (年) $(A-B)/(C+D-E)$	9.0	6.5	7.9	5.6	8.5	6.4
(参考) 債務償還可能年数 (年) $(A-B)/(C-E)$	11.0	7.4	9.1	6.1	9.8	7.1

* 将来負担額及び充当可能基金残高は、地方公共団体財政健全化法上の将来負担比率の算定式による。

* 業務収入は、資金収支計算書における業務収入による。

* 業務支出は、資金収支計算書における業務支出による。

4. 効率性・行政サービスは効率的に提供されているか

(1) 住民一人当たりの行政コスト

行政コスト計算書上の純行政コストから住民一人当たりの行政コストを算定し、行財政の効率性の度合いを表します。

	平成30年度		令和元年度		令和2年度	
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
純行政コスト (百万円) A	11,685	17,938	11,752	18,163	15,290	21,528
人口 (人) B	26,590	26,590	26,325	26,325	26,104	26,104
住民一人当たりの行政コスト (万円) A/B	43.9	67.5	44.6	69.0	58.6	82.5

5. 弾力性・資産形成を行う余裕はどのくらいあるのか

(1) 行政コスト対税収等比率

資本形成を伴わない行政コスト（純経常行政コスト）に対して、どれだけ当年度の負担で賄われたかを判断する指標で、この指標が100%に近いほど資産形成の余裕度が低いとされ、100%を上回ると過去から蓄積された資産が取り崩されたことを表します。

	平成30年度		令和元年度		令和2年度	
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
純経常行政コスト (百万円) A	11,262	17,613	11,438	17,849	12,033	18,271
一般財源等 (百万円) B	12,898	19,288	13,295	19,908	16,873	23,399
行政コスト対税収等比率 (%) A/B	87.3	91.3	86.0	89.7	71.3	78.1

6. 自律性・歳入はどのくらい税収等で賄われているか

(1) 受益者負担比率

行政コスト計算書の経常収益は、使用料及び手数料など行政サービスに係る受益者負担の金額を表し、これを経常費用と比較することにより、行政サービス提供に対する直接的な負担の割合を算出します。

	平成30年度		令和元年度		令和2年度	
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
経常収益 (百万円) A	664	1,690	587	1,469	448	1,305
経常費用 (百万円) B	11,926	19,303	12,025	19,318	12,481	19,576
受益者負担比率 (%) A/B	5.6	8.8	4.9	7.6	3.6	6.7